

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0570812610		
法人名	有限会社 グループホームさんぼみち		
事業所名	グループホームさんぼみち中仙		
所在地	秋田県大仙市長野字太田袋1-1		
自己評価作成日	平成22年12月2日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

以前アパレル工場だった施設の作りは空間が広々としていて、各居室も広く設計されており、広い廊下は雨天時の散歩の代替として歩行訓練を兼ねて活用している。また、ホールの広さはレクリエーション活動の場として有効に活用できるものとなっている。施設の周りは自然に恵まれており、利用者が作業できる花壇や菜園が設けられている。散歩コースの道端には自然の花が咲き、摘んで帰るのを楽しみにしている入所者も居る。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://kaigo-service.pref.akita.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 秋田県社会福祉事業団		
所在地	秋田市御所野下堤五丁目1番地の1		
訪問調査日	平成22年12月21日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は齊内川のすぐ近くにあり、桜並木路は利用者の散策コースとなっており、日々の体力維持のほか、地域の方々と交流するよい機会ともなっている。事業所は2階建ての2階にあり(エレベーターが設置されている)広いホールや居室からは地域の田園風景を見渡せるなど、安らぎの時を過ごすことができる。事業所は利用者の健康活動に重点的に取り組んでおり、利用者は日中はよく活動し、夜間はよく睡眠するという生活リズムを保ち、心地よく生活している。管理者は長く福祉活動に取り組んでおり、地域への貢献も考慮しながら運営にあたっている。利用者のケース記録や家族への連絡票等もよく記録されている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者と管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	自分で出来ることは自分でという基本理念を始め、共同生活の中でお互いに支えあう精神を共有しながら日々実践に取り組んでいる。	「自分でできることは自分で行う」「体力の維持向上に努める」等の理念を職員は理解し、実践に取り組んでいる。特に体力の維持向上のため散歩や音楽に合わせたレクリエーションを日課に取り入れるなど、利用者にとって健康的な生活となっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩コースを近隣の家々の前を通るように設定し、挨拶する機会を多くするようにしている。また、町内会に加盟し交流できる機会を求めて情報を得ている。	事業所主催の事業(踊りなど)の案内状を地域住民に配り、参加してもらっているほか、地域の伝統行事や祭典にも参加し、つながりを持っている。また、近隣の中学生や有志のボランティアも積極的に受け入れている。	
3		○事業所の方を活かした地域とのつながり 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に伝え、地域貢献している	施設の行事や開設記念イベント等に気軽に参加していただくよう地域の方々にお知らせをしている。また、行事やイベントには地域の生涯学習の団体に発表の場として来ていただくようお願いしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	施設で毎回議案を一つ提示し、会議で話し合うようにしている。会議で出た意見はその後各職員に報告し、さらに意見を求めている。活用できる意見については、申し送りや連絡ノートを通じて実施の方向に向う。	定期的開催されており、事業計画や運営状況、火災予防や避難誘導、外部評価における改善の取り組み等について具体的に報告している。参加メンバーからの意見も出され、理解・協力を得ている。	協議内容も念入りに検討され、各出席者から意見も出され課題解決に取り組んでいる。今後は会議の結果を他職員にも速やかに周知して課題を共有することにより、運営への意識を高めていくことも期待される。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	積極的に事業所の実態を伝えることは行っていないが、依頼のある各種の調査には応じている。また、問題が生じたときには解決に向けての情報や指導を受けるべく相談を行っている。	運営推進会議を通して利用者の状態や事業所の状況を把握してもらっている他、市職員からの意見を取り入れ改善に努めている。各種の調査、研修にも積極的に応じるなど、相談できる関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員は拘束に関する具体的な禁止行為を理解しており、身体拘束のないケアを実践している。	利用者は日中はよく体を動かし、夜間はぐっすり眠るという生活リズムが良く保たれ、身体拘束は見られない。自宅で過ごしているときに問題があったが入居後は落ち着いて過ごしている利用者もいる。職員は研修などを通して身体拘束しない実践を行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修を通じて虐待の防止について学ぶ機会を設けている。各自が、周りで虐待が見過ごされていないか常に注意を払って防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在数名の方が権利擁護の支援を受けており、支援員との会話の中で制度の理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には契約書を読み上げて内容を説明しながら、疑問や不安を解消するように努めている。理解と納得の上での契約締結を実施している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には家族をはじめ、利用者の方にも1名出席してもらっている。利用者や家族の意見や要望が直接会議で抽出でき、運営にも反映させることが容易となっている。	食事や余暇時間など、利用者からの希望があれば取り入れている。家族等には、毎月連絡票で利用者個々の生活状況を詳細に報告し、家族の意見を伺う体制となっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議を通じて職員の意見や提案を述べる機会はあるが、運営に関する意見や提案が出る機会が少ない。	毎月の職員会議や毎日の引き継ぎでのミーティングを通して職員の意見を聞く体制にしており、管理者は職員が意見を出しやすい雰囲気づくりに努めている。研修等により職員の育成にも努めている。	採用後比較的新しい職員が多いが、利用者支援に意欲的であり、職員同士の連携もよく行われている。今後はさらに支援技術の向上を図るため、研修等を充実していくことも期待される。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の能力を引き出し、楽しく働けるような環境づくりを考慮している。給与水準や労働時間等については、職員の理解を得て決定している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、代表者自身や管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修を受ける機会は確保している。また、力量のあるものと経験の少ない者との組み合わせでシフトを組み、ベテランによる指導でレベルの引き上げを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、代表者自身や管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同敷地内にある他事業所との勉強会や親睦会の交流を行なっている。互いの良い面や悪い面を話し合い、サービスの向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所初期に、本人を交えて、管理者や介護スタッフ、ケアマネなどが気軽に話し合う機会を設けている。雑談の中から信頼関係を生み出したいという意図がある。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が抱える悩みや不満は、利用者の解決すべき課題に通じる場合が多い。的確なサービス計画の提示が家族の信頼を得ることに繋がり、関係づくりに有効である。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている ※小規模多機能型居宅介護限定項目とする			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、利用者と共に笑ったり、悩んだりしながら家族に近い関係の構築を目指している。そこには家族としての厳しさも必要なことも学ぼうとしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には、行事や施設のイベントに参加してもらい、利用者と同じ時間を共有してもらう。また、面会時には利用者の話した思いがけない言葉やエピソードを伝えて、絆づくりに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近隣の方や古い友人が訪ねて来る場合は職員をひとり貼り付け、会話を楽しいものにするよう図っている。認知症が表出しても職員のフォローで楽しいものに変れば次の面会に繋がるのではと考えている。	利用者個々の事情から面会の機会が少ない場合は、行事や施設のイベントに参加してもらえるよう働きかけている。状況によっては職員が仲立ちして関係維持に努めている。敷地内に同法人の2事業所があり、交流の機会を持つなど新しい馴染みの関係づくりに努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共同作業(お手伝い)を通じて、それぞれ役割と分担を決め、作業がそれぞれ自発的に行なえるような環境づくりに努めている。また、散歩においても歩行の不安定な方の側にはしっかり歩ける人が付くような、自然な支え合いが出来つつある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	有料老人ホームへ転入された利用者がいるが、必要な情報提供や相談は現在も継続しており、支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	3ヶ月ごとのケアプランの見直しやモニタリングの際に、意向の聞き取りを行っている。思いや意向にあまり変化はみられず、同じようなものが繰り返し口に出る。	職員は午後のリラックスしている時間帯に話しかけたり、利用者が好む活動を取り入れ一緒に過ごすなどのコミュニケーションづくりをし、思いや意向の把握に努めている。「利用者の手伝いの状況と今後出来ることについて」というリストを作成し、利用者の生きがい対策としている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、生きがい、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	初回のアセスメントでこれまでの暮らしの把握はなされているが、日々の会話の中で新しい情報が聞き取れれば記録に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	アセスメントシートの作成の中で、暮らしの把握は行われているが、加齢による変化や病状の変化に対応して現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	サービス担当者会議においてチームの意見は出し合えるが、家族がその中に入っていることは少ないのが現状である。チームの一員として家族があることを理解してもらう必要がある。	利用者個々の日々の記録は時系列で記入している。日中と夜間はペン色を変え、重要な箇所にはマークをつける等、詳細な工夫をしている。それらの記録をもとに介護計画が6カ月毎に検討され、作成されている。家族からの要望も適宜計画に加えられている。	介護支援計画書のサービス援助内容の欄について、一部に時期的に困難と思われる内容が見られたほか、モニタリングについて、より内容を充実していくことも今後期待される。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の個別記録としてケース記録は最も重要なものであるが、気づきや工夫において十分に記録されていない部分が見られる。日誌や連絡ノートも重要な記録ではあるが、ケース記録の充実が反映や見直しには有効であると考え。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる ※小規模多機能型居宅介護限定項目とする			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	駐在所、消防署、生涯学習団体、開業医等地域に根ざした資源に支援を働きかけながら、利用者の安心で安全な楽しい生活の保障に努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等の利用支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望を受け入れながら、利用支援を行っている。隔週の主治医の回診で利用者の健康管理に努めている。	かかりつけ医は事業所近くの医院であり、月2回往診してくれており、利用者の健康管理はよくなされている。職員も利用者の健康状態に関わる情報を把握している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	隣接する短期入所施設の看護師の方から助言を得ている。また、回診に医師と一緒に来る看護師の方にも電話で相談に乗ってもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、病院関係者と連絡を取りながら治療を見守っている。また早期退院出来るよう協力を努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	近い将来を見据えてこの問題には真摯に取り組んで行く必要を感じており、前年対象者がひとり居たことを参考に、マニュアル作りの作成を検討している。	事業所として、将来的には利用者本人にとって最良の治療方法を優先していくために医療機関、職員体制等を考慮し、重度化・終末期に向けた対応を検討していきたいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の実践訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時の対応のマニュアルは作成されているが実践訓練は行なわれていない。実践力は不明である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法定の避難訓練の実施により、避難方法や行動手順は周知している。地域の応援要請手順と協理解は得ている。	緊急通報装置は一部設置され、避難訓練も実施し、都度、課題の解決に取り組んでいる。敷地内にある他事業所と災害・緊急時の連携が図られている他、隣接の企業からの応援体制もできていることを確認した。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員の声の大きさや動きが利用者のストレスにならないよう配慮しており、一人ひとりの声かけにも尊厳を損ねないよう言葉遣いに注意している。	様々な経歴や思いを持った利用者に対し、職員は一人ひとりの立場、プライドに配慮しながら支援している。また職員同士も利用者のプライバシーを損ねないよう、都度注意し合える関係にある。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員の買出しに同行してもらい、食べたい物などの希望を聞くようにしている。また、折にふれ行きたい場所やしたいことなどを尋ねるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の中に、民具のわらじを作る人がいて、道具や材料の取り揃えを支援しているところである。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している ※認知症対応型共同生活介護限定項目とする	大事な洋服はタンスに入れてなかなか着ようとしませんが、行事やお出かけのときには着用してのおしゃれを勧めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の旬のものが入ったときはどんな料理方法で食べたいか尋ねている。たけのこやふきなどは皮をむく作業を職員を含めみんなで行なっている。普段の食事においては、準備や片付けは分担しながら利用者も参加している。	利用者は買出しや調理、盛り付け、配下膳、テーブル拭き等、食事全般にわたってそれぞれの好みに応じた役割を担っている。日課には体を動かすレクリエーション等を取り入れ、食が進むよう配慮している。また、敷地内の菜園で利用者と共に栽培、収穫した野菜を食材にし、食欲増進につなげている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう状況を把握し、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の量は一人ひとりの量を変えて、体重への配慮を行っている。水分補給においても一日の摂取量を意識して提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分で行える人は声かけを行い。介助を要する人には必要な支援を行って口腔内の衛生に配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	時間による排泄誘導を行い、出来るだけトイレでの排泄を心がけて支援している。排泄の自立支援には尿意と便意の有無が鍵となることから、声かけを多くして、排泄の意識を高めることに努めている。	利用者ができるだけトイレで排泄できるよう支援し、夜間もトイレに誘導している。冬期間はトイレに暖房器具を置いて安全に配慮している。また、トイレ内は広くプライバシーにも配慮されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	手作りの調理の為、食物繊維など取り入れたり、晴れた日は散歩するなどして運動するように努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングや健康状態に合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には希望入浴で、入浴したい人はいつでも入浴できるようにしているが、現在は週2回の定期入浴日以外の日の入浴希望者はいない。	一日の活動リズムの中で、入浴も利用者の楽しみの一つとなっている。職員は利用者のプライバシーに配慮し、一人ずつ職員の介助によりゆっくりと入浴している。浴室、更衣室共に広い空間で温度も適切である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転しない様、散歩やレクリエーションをしたり、布団干しを常にしている為、全員快眠している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解に努めており、医療関係者の活用や服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員の薬に対する知識と理解は今後さらに深めて行かなければならない分野である。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	みんながそれぞれ違うことを楽しんで過ごす日々があってもいいと思うが、現在は1名、民具作りに熱中しているひとがいる。今後もこのような利用者の支援に努めたい。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している ※認知症対応型共同生活介護限定項目とする	買物ドライブをはじめ、行楽のお出かけを多くしたいと考えてはいるが、介助者より被介助者の人数が多い現在の実情では、全員が一同に出かけることは困難である。何人かに分けて買い出しに同行してもらおう形で出かけているのが現状である。	近くに斉内川の桜並木路があり、散歩を通して地域の方々との交流を楽しんでいる。また、気分転換、ストレス発散のための外出を積極的に取り入れている。月々の外出も春の花見や買い物ツアー、地域の祭り見学等、計画的に行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	以前買物ドライブにおいてレジで買い物が出来た人は1名しかいなかったが、お金を自分で所持するという体験は貴重だと考える。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自分で電話をかけることが出来る人はいないが、相手呼び出すまでの支援は行っている。また、手紙のやり取りにおいても投函等の支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、臭い、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	空調の温度については、暑がりの人や寒がりの人がいて微妙な調整の必要な面もあるが、22度～25度の室温範囲を目処に温度管理を行っている。ホールに利用者と一緒に作った貼り絵や折り紙の作品を掲示している。	皆が過ごす広いホールは明るく、日課表や職員・ボランティアと共に制作した四季折々の貼り絵や折紙が飾られ、季節感が感じられる。日中は多くの利用者が広いホールでクリエイションや製作活動をして過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている ※認知症対応型共同生活介護限定項目とする	食堂の席がなじみの場所になりやすいところから、食事のテーブルの同じ席の方々が気の合う仲間のようなところである。他に、ソファやベンチ、ストーブ前などそれぞれお気に入りの場所が確保されている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	広い居室にはなじみの使い慣れたものを置く場所が確保されているので、搬入を勧めている。	居室は広く、窓から田園風景が見渡すことができるなど、安らぎの場となっている。利用者の好みに応じてベッドや畳敷きの居室もあり、利用者個々の写真、人形、鉢物、雑誌等が持ち込まれるなど、生活感が表れている居室であることが確認できた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	広い廊下にはなるべく物を置かず、自由に行動できる空間として提供している。施設内の掲示物も利用者にとわかりやすい表示を心がけている。		